参考書誌研究・第三一号（一九八六・三）

「愛国」という語

山内育男

一　本稿の課題
二　「愛」字の和訓
三　「愛」字の字義
四　漢語「愛」の原義
五　辞書における「愛国」
六　「愛国」の初出
七　中国の辞書における「愛国」
八　結　語

一　本稿の課題

「愛国」という語がある。この語は、中国本来の漢語であるか、和製の字音語であるか、それとも中国または日本で作られた翻訳語であるか。これが本稿の課題である。

二　「愛」字の和訓

国を愛するという、その「愛（あい）」は勿論、和語ではない、漢語である、元来は外国語である。外国語である漢語を和訳したものが和訓である。例えば漢語「貓　mǎu」の和訓は、

ネコ、ネコマ、カラネコ

である。訳語は必ずしも一つとは限らないこと、他の外国語の場合と同様である。ネコについて言えば、手許の英和辞書には、

cat　1ねこ科の動物、ねこ。2意地悪女、よくひっかく子供。3〔俗〕あいつ、あの野郎。

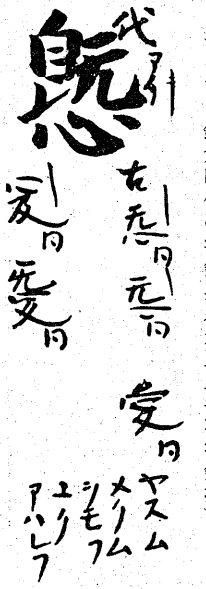
とある。「愛」にも和訓がある。日本人が漢語「愛」をどのように理解したかは、その和訓を見れば分かる。

万葉では、「愛」字を、

ウツクシ、ウルハシ、ハシキ、マナ

などと訓（よ）ませている。これも和訓の傍証とはなる。平安初期の西大寺本金光明最勝王経訓点には「メグシ」とある。以下、古字書に拠る。

院政時代の類聚名義抄（観智院本）では、「愛」字に付訓しないが、その古字には付訓する。



右の注記中の「谷」は「俗」の省筆、俗字の意。「亡」は「音」の省筆、字音の意。「古」「正」はそれぞれ古字・正字の意。

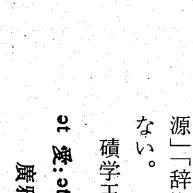
また、色葉字類抄（三巻本）には、

オシム、アハレフ、ヤスシ、コノム、アタラシ

とある。

ついで、鎌倉時代の字鏡集（永正五年写字鏡抄）。

つぎは室町時代の倭玉篇（慶長一五年整版本）。



江戸時代の字書類も大同少異である。

以上の和訓を考えると、「愛」と「国」とは熟字として所謂patriotismを意味する「愛国」とはなりにくい。逆に言えば、「愛国」の「愛」には、以上の和訓のいずれも適切でない。強いて挙げるなら「オモフ」がわずかに南鴻北矢の譏りを免れうるかも知れない。しかし、「オモフ」という和訓を持つ漢語は、類聚名義抄に見ても約七〇ほどある。「国をおもう」の「オモフ」は「愛」字でなければならない、とする根拠は指摘しえない。

「愛」字を訓でなく音で「愛ス」と読んだ場合の用例を古典に求めても、その表わす意味は和訓の範囲を出ない。

江戸末期までの文献には、「愛国」という熟字は見当たらない。と言うことは、この語は維新前後に作られた字音語、ひいては中国本来の漢語でもなかったもの、かとの疑を生じさせる。

三　「愛」字の字義

これを確めるため、まず中国の字書について、「愛」字の字義を尋ねてみる。ところが、曲亭氏ならば、事は意外に出でて意外に在り、とでも言いかねないほど、中国現代の辞書である「辞源」「辞海」や「重編國語辭典」の類は、このための役には立たない。

磧学王力先生の「同源字典」には、つぎのようにある。

at 愛：at 恐（同音）

廣雅釋詁四：“愛，仁也。”爾雅釋詁：“惠，愛也。”左傳昭公二十年：“古之遺愛也。”賈注：“愛，惠也。”

説文：“恡，惠也。”朱駿聲曰：“經傳皆以愛爲之。”按，“愛、恡”實同一詞。

「愛」は物部影母に属する語、「鬱」「蘊」と同源であると言う。

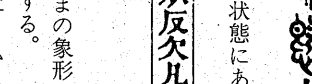
忠良切言、皆鬱於胸。（漢書路温舒傳）

我心蘊結兮。（詩檜風素冠）

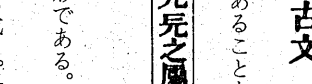
そして、右の「鬱」「蘊」の義は「滞」「積」であると言う。以上のことを勘案すれば、「愛」と「国」とが熟字として所謂 patriotism を意味するとは考えがたい。以下、説文解字（中華書局影印本）に拠る。

説文の語源説の細部の一々は、必ずしも現代諸学者の容認する所ではないが、凡そ一八〇〇年の昔に作られた本書を凌駕するほどの語源研究書は、現在もまだ存在しないのであるから、已むをえない。

「愛」の古字は「悉」である。

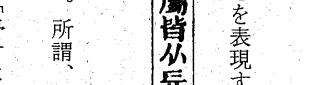


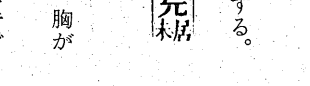
これは諧声であり、「心」が「旡」の状態にあることを表現する。

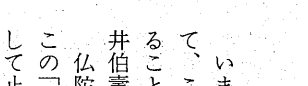


「旡」の篆文は、ため息をつくさまの象形である。所謂、胸がつまる、胸につかえる状態を表現する。

つぎに、「愛」字は「罒」と「夋」とから成る。「罒」は手で保持するさま、「夋」は「心」が「夂」の状態にあることの表現。







「夂」「久」「夊」いずれの篆文も、足を引きずり背を屈めて歩くさまの象形で、行歩の遲々として進まざる状態を表現する。「心」がこのような状態を保持しているのが「愛」であり、「愛」は「哀」「慨」と同源の語である。

四　漢語「愛」の原義

いま一つ、「愛」の原義を尋ねる手がかりは、古代中国において、この語が外国語の何という語の訳語に用いられたかを調べることである。それには漢訳仏典に当たるのがよい。以下、宇井伯壽の「佛教思想研究」に拠る。

仏陀は、十二因縁において、苦は愛の所産であると説いた。この「愛」と訳された原語は、taṇhā である。この語は、水を欲して止まない渇の状態を表わし、「渇愛」とも訳される。taṇhā は本能的の根本希求欲望であって、これは満足されることがない。求めて得ることができない。それが dukkha、漢訳して「苦」である。

おそらく、漢語「愛」の原義には、梵語 taṇhā の訳語に充当されてよいだけの意味を含んでいたのであるまいか。漢語「愛」

が「吝惜」という意味を併せて持つのは、その原義に「求める」という意味があるからではなかろうか。得ようとする心は、失うまいとする心と、一つのものの異なる作用・発現である。

ヘラクレイトスが喝破したように、万物は流転する。語義もまた変遷する。「先生」とは元来は敬重すべき人物のはずであるが、「先生と呼んで灰吹き捨てさせる」という川柳もある。わたくしなどは、毎日、灰皿を洗っている。

求めて得ることができない状態では、確かに胸もつかえるし、鬱懐も生じる。この原義から、先に挙げた和訓に見える幾つかの意味が転義として派生したものであろう。

勿論、中国の古典には、「国ヲ愛ス」という言葉遣いが見えている。

明主愛其國、忠臣愛其名。（戦國、秦策）

周君豈能無愛國哉。（戦國、西周策）

封建諸侯、各世其位、欲使親民如子、愛國如家。（荀悦漢紀、景帝紀）

などがこれである。だが、これはpatriotismの「愛国」ではない。君主の愛国であって、人民の愛国ではない。後節に掲出する英華辞書の訳語や用例に見るとおり、patriotismの「愛国」とは、人民が国を愛することである。

要するに、中国本来の漢語には、patriotismに相当する熟字としての「愛国」は見当たらない。むしろ、ないのだと、言い切ってもよかろう。このことは、初期の英華辞典がpatriot; patriotismの語釈中のto love one's countryに、「愛国」という訳語を、容易には与えようとしなかった事実からも傍証しうる。

君主の愛国の「愛」は「仁恵」であり、「愛惜」である。この場合の「愛」の語義もまた和訓の範囲を出ない。そして、君主の愛国の「国」は、論語に、

有民人焉、有社稷焉。（先進第十一）

という民人であり、社稷である。

五　辞書における「愛国」

国語辞書における「愛国」という語の初出は確定しがたい。いま、その最初期に属すると認められるものを、幾つか挙げておく。

「開明節用集」　山本與助　明治七序（明治九刊）

愛國（アイコク）　愛想（アイサウ）　クニヲモフ

「布令新聞新撰校正普通漢語字引大全」　平田槃　明治八

愛妾（アイセフ）　キミニリノ　メカケ

愛國（アイコク）　クニヲダイジニ　ニシスル（「クニヲダイジニスル」の誤か。）

「校正増補漢語字類」　荘原和　明治九

愛惜（アイセキ）ー　メダヲシガル

愛國（アイコク）ー　クニノオタメヲ　オモフ

「御布令新聞漢語必要文明いろは字引」　片岡義助　明治一〇

愛敬（イツクシミ　ウヤマフ）

愛國（クニヲ　ヲシム）

愛憐（アハレム）

そして、これは高橋五郎の「漢英對照いろは辞典」（明治二二）、「和漢雅俗いろは辞典」（明治二二）、その他にも引き継がれて行く。

あいこく　愛國（己の國を大事に思ふ事）Patriotism; patriotic.

あいこくしん（名）　愛國心（己の國を大切にする心）Patriotic heart, love of one's country.

あいこく　愛國（己の國を大事に思ふ事）

あいこくしん（名）　愛國心（己の國を大切にする心）

このようにして、「愛国」という語は、まず通俗的な用字・用語辞書の類に採録されたが、所謂、本格的辞書は、未だこの語を採録するに至らない。この事実は、確かに、この語の出自を暗示する。近代的国語辞書への第一歩を踏み出したものと評価してよい「語彙」（編輯総裁　木村正辞　編輯寮刊）の「阿之部」（明治四）は、この語を掲載しない。本格的辞書で、この語を採録するものは、物集高見（もずめたかみ）の「日本大辞林」（明治二七）からであろうか。

あいこく　ナ。愛國。くにをたいせつにおもふをいふ。

「日本普通語ノ辞書ナリ」と言う大槻文彦先生の「日本言海辞書」（明治一七序　明治二二―二四刊）も、この語を掲載しない。ただ、「あいーす（愛）」の項に、「國ヲ愛ス」の用例がある。山田忠雄氏は、「言海」を評して、「明治初年以降官民共に用いた所謂　漢語や字音語　を載せる事が少い」ことを、その欠陥の一つとする（「近代國語辞書の歩み」一九八一）。「愛国」という語も、このうちに包含されるであろう。

大槻先生は、「大言海　第一巻」（昭和七）に至って、この語を採録した。その語釈の特色は、他の諸辞書、例えば、上田萬（大言海）

あい-こく（名）　愛國　クニオモヒ。自國ヲ愛シテ、心ヲ盡スコト。忠君愛國、愛國心ナド云フヘ、人民ノ、其國家ニ對シテ、尊敬、感恩、依賴等ノ念ヲ懷キテ、其存續、發展ヲ圖リ、外國ノ犯ス事ナドアラバ、極力、コレニ抵抗シ、國ノ利益ヲ保護シ、利權ヲ伸張セム、トスルコトナリ。戰國策、秦策「明主愛二其國一、忠臣愛二其名一」

（大日本国語辞典）

あい-こく 〔愛國〕（名） 自國を大切に思ふこと。「愛國の思想」 荀悅漢紀「親民如子、愛國如家」

年・松井簡治共著「大日本國語辭典」（大正四―八）と比べても明らかである。語義を剔抉すること、即物的かつ具体的である。国語辞書についての限り、有象無象の lexicographer は存在し存在したが、真に lexicographist の名を献呈するに足る人は、大槻先生ただお一人であり、また、あったと言えよう。

「愛国」の語釈についても、先生の語釈の懇切周到なる、間然する所はない。とくに「人民ノ」の一句は、この語釈の眼目である。ただ、惜しむべきは、例文に秦策を提示されたことである。これは先生の千慮の一失であったろう。語釈では人民が国を愛し、例文では君主が国を愛する。語釈と例文と、互に乖離背馳すること、風馬牛も及ばない。「大日本國語辭典」もまたこの謬を犯している。さらに、この謬は「日本国語大辞典」（昭和四七―五一）にも引継がれている。誠に、辞書を作ることほど、後人を誤るものはない。孟子には、盡信書則不如無書とある。辞書もまた尽くは信ずべからざるものの一つである。

国語辞書について、英和辞書の類を見れば、訳語としての「愛国」という語の初出は、これもまた確定しがたい。

属目のままに記述すれば、柴田昌吉および子安峻の共編による「附音挿圖英和字彙」（一八七三　明治六）は、その最初期の一つであろう。

Patriot (pā' tri-ot), *n.* 義士。愛國者

Patriotic (pā-tri-ot' ik), *a.* 義氣アル。忠信ナル。節烈ナル。愛國ノ情アル

Patriotically (pā-tri-ot' ik-al-li), *adv.* 父母ノ國ヲ愛シテ

Patriotism (pā' tri-ot-izm), *n.* 義氣。忠心。忠義。愛國ノ情

訳語を対照するために、loyalty の項をも併せて掲出する。

Loyal (loi' al), *a.* 忠ナル。忠義ナル。忠直ナル

Loyalist (loi' al-ist), *n.* 忠臣。義士

Loyally (loi' al-li), *adv.* 忠義ニ。貞實ニ

Loyalty (loi' al-ti), *n.* 忠義。貞實

美国平文先生の「和英語林集成」では、その第一版（一八六七　慶応三）・第二版（一八七二　明治五）ともに、本文の部に「愛国」という見出語はなく、索引の部に「愛国」という訳語はない。それは第三版（一八八六　明治一九）に初めて見えている。

（第1版　索引）

PATRIOT, Chiushin.
PATRIOTISM, Chiushin; chiugi.

（第2版　索引）

PATRIOT, *n.* Chiu-shin, gi-shi.
PATRIOTIC, *a* Chiu-naru.
PATRIOTISM, *n.* Chiu-shin, chiugi.

（第3版　本文・索引）

AIKOKU アイコク 愛國 (*kuni wo aisuru*). The love of country; patriotism: — *shin*, patriotism; — *no jō*, id.

PATRIOT, *n.* Chūshin, gishi, aikokusha.
PATRIOTIC, *a.* Chū-naru, aikoku no.
PATRIOTISM, *n.* Chū-shin, chūgi, aikokushin.

附音挿圖英和字彙」に先行する辞書は、「英和對譯袖珍辞書」（一八六二　文久二）である。これは幕府の訳官、堀達之助が編集主任となり、洋書調所から出版された。底本は、H. Picard の *A new pocket dictionary of the English-Dutch and Dutch-English languages.* の第二版（Zalt-Bommel, 1857）の英蘭の部であるが、訳語は「和蘭字彙」（Hendrick Doeff 他著　桂川甫周校訂　一八五五―一八五八　安政二―五）の影響を受けている。両者の対照はつぎのとおりである。

（英和對譯袖珍辞書）

Patriot, *s.*　父母ノ国ヲ愛ス人

底本には、たんに Patriot, *s. vaderlander. patriot, m.* などと、あるにすぎない。

和蘭字彙

vaderlander. f. m. iemand die zijn vaderland. Hij betoont dat hij een getrouw vaderlander is.　本國ヲ好テ居ル人。彼ハ本國ヲ好テ居ル樣ニ見ヱタリ

「和蘭字彙」は、所謂「ドゥーフ・ハルマ」（一八一〇年代、文化年間成立）の版本と言ってよく、底本は François Halma *Woordenboek nederduitsche en fransche taalen*, . . , 2. ed., 1729. である。蘭語の筆記体は読みにくいので活字体に改める。

VADERLANDER *z.* m. voorstander zijns vaderlands. *Celui qui aime sa patrie.* Hij betoont dat hij een getrouw vaderlander is. *Il témoigne qu'il est un fidèle compatriotte.*

底本の体裁は、蘭語見出語・蘭語による語釈・仏語による語釈・蘭語例文・例文仏訳、となっており、「和蘭字彙」では、仏語の個所は、勿論、省かれている。語釈の邦訳は、不思議なことに仏語語釈によっている。蘭語語釈によれば、祖国の守護者、とでもなろう。そして、例文の邦訳は、蘭仏のいずれによるも、完全な誤訳としか言いようがない。

「英和字彙」の場合、もし、その底本が、John Ogilvie の *Imperial dictionary of the English language.* London, 1855（New edition, 1871）または *Comprehensive English dictionary.* London, 1863. のいずれかであったとすれば、その patriot の語釈は、A person who loves his country, and zealously supports and defends it and its interests. である。これを簡潔に「愛国

者」としたところが、柴田・子安の手柄かと言うに、そうではない。彼等は世間の通用に従ったまでである。

六　「愛国」の初出

「愛国」という語は、すでに一般に行なわれていた。それは、人名にも、政党名にも、用いられている。

人名としては、「本朝辭源」（宇田甘冥著　明治四）の校閲者に、堀越愛國という人がいる（伝、未詳）。政党名としては、愛国公党（明治七年結成）・愛国社（明治八年結成）などがある。明治初年、国学者・漢学者・洋学者、そして民権論者と、それこそ禰宜も釈子もその別なく「愛国」を説いているさまは、一種の奇観でさえある。「愛国民権家」という語まで発明された。

当時の「愛国」とは、どんな思想であったか。これには二つの派がある。

一つは、ひたすらに忠君の誠を尽すことが、すなわち世界における日本の独立を全うする所以であって、これが愛国である、と言うもの（萬国交際大緊要愛國説」　明治七）。謂わば、忠君愛国派とでも称すべきものである。

いま一つは、自由の民権を確立することが、すなわち世界における日本の国権を拡張する所以であって、これが愛国である、と言うもの（「愛國志林」　明治一三）。謂わば、民権愛国派とでも称すべきものである。

この両派の立脚地は根本的に異なるが、いずれも国家主義であることに変りはない。そして、この国家主義は当時の国際的環境が触発策励したものである。ただ、この思想を表現するのに、本来の和語でも漢語でもない、その意味では素姓がいかがわしいとも言える「愛国」という語を用いたところは、一つの時代的風景である。

この「愛国」という語の文献上の初出は、これも特定しがたい。ただ、この語の初期の使用例が翻訳書に出現すること、ならびに、初期の使用者が洋学に薫染した人物であること、この二つの事実は、これまた確かにこの語の出自を暗示する。以下、任意に属目のまま挙例する。

人民ヲ一體トナシ以テ國家共同ノ念ヲアラシメサレハ外寇ヲ禦キ外侮ヲ防クカ如キ愛國ノ義念薄ク（ミル氏著　永峰秀樹譯「代議政體　四」　明治八）

是故ニ人民愛國ノ心アル者ハ須ラク（自由ノ）此精神ヲ育成スルヲ務ムヘシ若シ苟クモ（自由ノ）此精神ヲ非トシ例ノ卑屈心ヲ以テ是トスルトキハ縱令ヒ愛國ノ情如何ニ深厚ナルモ眞ニ愛國ノ道ヲ失フカ故ニ好テ國家ノ衰頽ヲ促スカ如シ（加藤弘之「國體新論」　明治八）

富强に屬する分
廉恥の風を崇ぶ、愛國の心を厚くせしむ、武勇節義を尊ぶ、奢侈華麗を禁ず（西村茂樹「富國强兵論」　明治一〇）

古昔希臘の初めて興るや、其民强健剛毅にして國を愛する

の心深し、故に能く波斯の大敵を破り、威名を四隣に耀かす、（西村茂樹「陳言一則」明治六）

今の世に生れ苟も愛國の意あらん者は、官私を問はず先づ自己の獨立を謀り、餘力あらば他人の獨立を助け成すべし。（福澤諭吉「學問のすゝめ　三編」明治六）

サレバ、コノ時、國ヲ愛シ民ヲ助クル義士、オモヘラク、カク人民ノ安カラザルハ、君主ノ權ニ限界ナキユヱナリ、今ヨリハ、君主民ヲ治ムルノ權ニ限界ヲ立テ定ムベシト、（彌爾著　中村敬太郎譯「自由之理」明治四）

右原文　The aim, therefore, of patriots was to set limits to the power which the ruler should be suffered to exercise over the community, ...

又人には萬物に向て選む外にPatriotism（愛国ノ誠）といふあり。己レか父子兄弟を思ふことにもあらず、唯夕自然に己れか生國を戀ひ思ふか如きこれを愛國の誠といふ。（西周「百學連環第二編　中」明治三）、

また、鶴峯戊申には、つぎの著書がある（未見）。

「愛國頌四十八韻」（安政三年自序）

戊申は、「三才究理頌二百五十二韻」（天保七年序）を述作して、国学・儒学・蘭学の三才に通暁すると自称した男であり、蘭語文法、つまり西欧語文法を下敷きにして、日本語文法を組織しようと試みた最初の男でもある。この浅薄な思いつきは当然にして学問的には失敗したが、彼の「愛国」とはつぎのようなものである。

赤心に國を愛する志を述べて、赤心録と名け候は當申候や否や不存候へ共、すべて天下の人々自國を愛するは當然にて御座候處、戊申は我帝國の御民たり、帝國の事を大切に存候赤心を相述候故、赤心録とは申候なり。（「赤心録」安政四年序）

戊申は、「愛国」という語の最初の使用者ではなかったにしても、その最初期の使用者の一人ではあった。

十　中国の辞書における「愛国」

法華・英華辞書の類に、「愛国」という訳語が出現するのは、管見の限りでは、一八九〇年代になってからである。

畢君「法漢合璧字典」北京　一八九一

Patriote 烈士。俠氣。忿不顧身。忠心。
忠君愛國。爲國肯捨命者。爲國捐軀。
Patriotisme 爲國致身。大義。赤心報國。盡忠報國。忠國。一點丹心終爲國。公心。俠士。眷戀故土。

「達辭字典」　香港　一八九八

Patriot, n. 忠烈愛國之士、壯士、

Patriotic, adj. 忠烈愛國的、如榮譽事皆以自己國爲榮貶者、戰則死於沙場不肯貶辱於國、

A *patriotic* soldier. 忠烈愛國之兵、

A *patriotic* statesman. / A *patriotic* minister. 忠烈愛國之臣、

Patriotism, n. 愛國之心、

He devoted himself to the duties of his high office (with true *patriotism*. 以忠烈愛國之心、

The plan was carried out by private individuals (in a pure spirit of *patriotism*. 以愛國之眞心者、

It is a noble *patriotism* which makes a man desire to leave behind him something which shall be benefit to his country after his decease.

Patriot 義士 i² sz². I sz, 助國者 cho² kwok, ʿché.
Tsú kwoh ché.

Patriotic 義氣的 i² hi² tik. I k'i tih, 忠 ʿchung.
Chung, 義 i². I, 節烈的 tsit, lit, tik. Tsieh lieh tih, 忠厚的 ʿchung hau² tik. Chung hau tih; patriotic zeal, 急公好義 kap, ʿkung hò² i². Kih kung háu i, 義氣 i² hi². I k'i; patriotic soldiers, 義兵 i² ʿping. I ʿping.

Patriotism 義氣 i² hi². I k'i, 忠心 ʿchung ʿsam.
Chung sin, 忠義 ʿchung i². Chung i.

顏惠慶「英華大辭典」　上海　一九〇八

Patriot, (pa'-tre-ot) *n.* One who loves his country, and is devoted to its interests, 愛國者, 義士, 忠臣.

Patriotic, (pa-tre-ot'-ik) *a.* Full of or prompted by patriotism, 愛國的, 義烈的, 忠義的.

Patriotically, (pa-tre-ot'-ik-al-le) *adv.* In a patriotic spirit, 忠義, 盡忠, 愛國之狀.

Patriotism, (pa'-tre-o-tizm) *n.* Love of country, 忠心, 忠義, 愛國心, 報國心, 公忠體國.

一八八〇年代以前の英華辞書の代表例として、羅布存德の「英華辞典」（香港　一八六八）を掲出する。

英華辞書における訳語の推移を見れば、英華辞書が冥冥裡に英和辞書から受けたであろう影響に想到しても、強ちに無稽とは言い切れまい。

日本人は、patriotism をその語釈 to love one's country によって、軽忽にも「愛国」と翻訳（むしろ誤訳）したが、中国語の「愛」の語義をよく知る人は、「愛」はこの場合の to love の訳語としては適切でないと考えたに違いない。確かに、to love が持つ語義のある部分は、「愛」としか訳せない。そして、ひとたび「愛」が love の訳語となるや、love の持つ語義のほとんどは「愛」に転移された。中国語辞書としては、最初の現代的辞書と評価されている「國語辭典」（初版　上海　一九三六　第一冊付印）の「愛」の項をつぎに掲出する。

【愛】（怎） ㄞˋ ay ài

[名]❶親慕的情緒或親慕的事物，如同胞愛、祖國愛、割愛。

❷仁惠，如「古之遺愛也。」（左傳・昭公二十年）

❸對女子的敬稱，通嫒，如「稱人之女曰令愛。」（類書纂要）

❹姓，見萬姓統譜。

[動]❶喜好、親慕，如「心乎愛矣。」（詩・小雅・隰桑）

❷吝惜，如「百姓皆以王爲愛也。」（孟子・梁惠王上）

❸兩情相悅，如相愛、戀愛。

[動]容易，如「天熱東西愛壞。」又「鐵愛生鏽。」

愛國 ㄞˋㄍㄨㄛˊ ay gwǫ àigwó

愛護國家，如「愛護國旗，是一種愛國的表現。」

だが、それでも、キリスト教徒は主イエス・キリストをloveするとは言うが、仏教徒は仏陀を愛するとは言わない。「愛」とloveとの語義は現在も全同ではない。これが、初期の英華辞書に、「愛国」という訳語の存在しない事情であろう。だが、一八九〇年代以降、中国において迅猛発展した民族運動は、この誤訳語の芬芬たる和臭にも拘泥せず、これを受容したのであるまいか。

「愛国」という語が一般語彙に取り入れられるには、日本において明治維新（一八六八）が必要であったように、中国においても辛亥革命（一九一一）が必要であったろう。

八　結　語

以上のように観察して来れば、patriotismに該当する「愛国」という語は、翻訳語として、と言うよりはむしろ翻訳語の意識なしに、日本人によって創作され、後に中国人にも受容された字音語であろうとは、相当の確度をもって推定してよろしい。これが本稿の結語である。

（やまうち・いくお　参考書誌部）

＊

＊